

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成 23年7月31日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学研究科 社会健康医学系専攻

職 名・学 年 専門職学位課程2年

氏 名 中 瀬 聖 史

助成の種類	平成23年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	Thinking Qualitatively 2011		
発表題目	The meaning of obstetric practicum and its consciousness among male student nurses in Japan		
開催場所	Edmonton, Albarta, CANADA		
渡航期間	平成23年 6月16日 ~ 平成23年 6月28日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000円	
	使用した助成金額	200,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空券	127,910 円
		学会参加費	\$ 868.00≒70,000 円
宿泊費		2,090 円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 助成に選ばれていなければアクセプトされていたにもかかわらず参加できておりませんでした。日本では学ぶことができない分野の研究を前に研究者として生きることの自覚ができました。ありがとうございました。		

成果の概要／中瀬聖史 京都大学社会健康医学系専攻専門職学位課程 2年

カナダアルバータ州エドモントンにあるアルバータ大学で2011年6月20日～25日にかけて開催されたThinking Qualitatively2011に参加した。アルバータ州エドモントンは北緯53度、西経113度の産油に恵まれた緑豊かな土地である。6月のこの時期では日本と比較しても既に非常に気温は低く、22時ごろまで暗くならない土地であった。アルバータ大学はエドモントンを流れるノースサスカチュワン川沿いに大きくたたずむ、カナダでも有数の州立大学である。

今回の参加の目的は、学会発表とワークショップへの参加である。Thinking Qualitativelyとはアルバータ大学が毎年行なっている質的研究に関する学会兼ワークショップであり、質的研究を志す大学院生から研究者までが世界中から集まり、質的な研究方法について学び研究する学会である。質的研究とは平たく言えば言語データや映像データなどの数値ではないデータを用いた研究であるが、その守備範囲は、ビジネス、医学、看護、経済学など非常に幅広く、参加している研究者も多種多様であった。最終日に研究発表が設けられており、今回は発表がアクセプトされたのを受け参加することにした。

ワークショップでは、定性的な研究とちがった独特の論文の書き方、現在実際に研究で用いられている質的研究法の様々な方法論に関する講義がなされており、午前午後に分けられたセッションを各人の研究に役立つように自由に選択できるようになっている。様々な種類の講義の中から全9の講義を選択するシステムであった。方法論だけではなく、研究ソフトウェアの使用に関する講義もあり、実際に研究者たちが直面する問題を解決するための授業ばかりが用意されていた。どの授業を選ぶのかということも非常に重要であった。

私は執筆法、現象学、セカンダリーデータの使い方、メタ研究法、などの授業を選択した。執筆法では実際に出版社のエディターが研究者に出版しやすい、受け入れられやすい書き方や注意事項などを学んだ。また現象学は今回私が発表した研究で用いた方法であり、他研究者の現象学研究の扱い方、基本的な概念をおさらいすることができた。日本ではあまり議論されぬまま研究がなされており、学びは広く深かった。最も興味深かった授業は、「グラントの取りかた」であった。この授業は、質的な研究者は金銭的に乏しいことが多いことを考慮して作られたものであり、如何にしてグラントを採るかというタイトルで、学会の最終日参加者全員を対象に行なわれた。日本でもまだまだ進んでいるとはけしていえない質的研究であり、日本には聞くことができない内容や議論に参加することができたため非常に勉強になった。

世界中から研究者が来るとはいえ大抵は英語圏出身であった。英語には不自由がなかったが、単純な学会発表に比べ議論される内容がより実践的かつ、幅広い内容であったため、理解できずに非常に苦勞した面もあった。様々な研究者に助けをもとめ質問をして理解に努めた。私より年齢も経験も豊かな研究者の討論になるため、そのようなベシックでの困難さはあったものの、先輩研究者たちと一緒に議論するなかで、研究法に関する新たな一面を学ぶことができ、また同じく研究を志す多くの研究者学生と出会えたことがかけがえのない日々であった。

最終日の発表は学士論文を発展させたもので、他の研究者がどのように反応するのか分からなかったため非常に不安であったが、ワークショップが先行していたこともあり、非常にカジュアルな状態からスタートしたため、沢山の研究者が質問を沢山してくださり、活気あふれる発表会場となった。自身の発表に加え、他の研究者の発表は、他分野でありながら多くの知的な刺激を受けた。

研究発表助成を頂いて今回の学会発表へ参加することができ、これまでよりも更に研究に打ち込む決意ができた。国際的に活躍できる研究者になるべくこれからも多くを学び、積極的に外国での学会等への参加を勧めていこうと考えている。